



竹書紀年

卅

1	75
5	



軍勢文

秋の物語より 巻之五

目録

塵境の壘

実法者の土徳 龍波の二風土 諸翁の海
 加茂の狼忌令 雲介の情交 波田赤松の刑
 あなをとりて途中の難儀 花あなを常りし
 徳田名 母波八丁山 土倉徳中を常死しけし
 江戸神田赤松を以て 美人の信交
 江戸土産 西中形を先上人 圓々の緋法
 女の御布

5曾1門
 75
 5

金屋

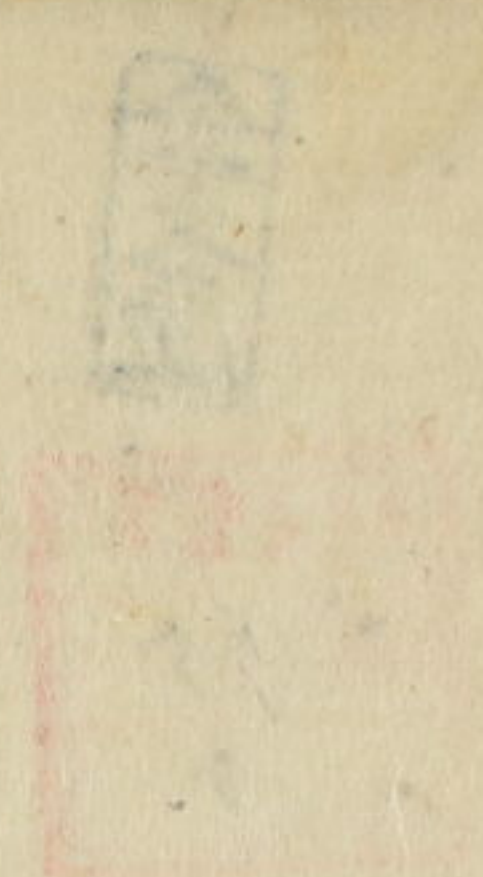
備 岡山油町
 余 貸本所
 前 六屋出店

備前守

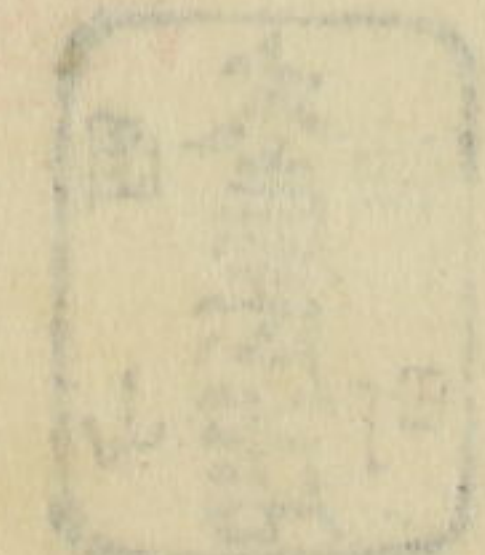
岡山 金屋 油町

秋の夜覚巻し五

今いむう一室居の夜あけゆふのぼるまよとまらみ
さうさふひ知とあはれをいとお者今ほくハナハの
波舟あつて黒目れ長足尔侍し昔ぬむ菫と批
まきとも是とていささるも芳がういささ寝静む
あがくまに敬慕ううふらの向ふるもともはみ
いづらうはゆるねめて甲をい物をふかきさの神
爽しう涼大細言隆回口の涼安しぬふる



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '秋の夜覚' and '巻し五'.



御て見るよ安んじよ其傳いせられくま
書あはめて空塚の墓と名にきくい吉田の
法沙の指のせりあもこせ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "空塚の墓" and "法沙の指".

○菊う菴へ帯の麻ふ街へ夫有一日十束斗
の島子とほき来たる実語を教てよせれ
余弦因りまの推のまるぬのおと取と見るよ大概
いよ免るやうなれとも中は、理測かとの教を足
しきすすくしと強り強しなよあいえとあし
あ卯(おせ)しとひとひのあふ常よ余と
教のやうよあが居りしふああとい具さの教
よま左風殿あかそとてとまきよねむは
ああをみてあふよあしりていむむは北を

之と初〜留〜船〜〜〜とひて止めしを
ふとあざみ葉よ〜〜と見れと是れなり〜之と想
ふ女いあ〜ゆるるは〜〜と物あせり
○天子も皇辰山園をあま〜お下る、殿重の情
古例あり〜宮東御ま〜と回極〜江戸大坂
外回〜〜と〜宮東の御ゆ〜とてま〜極あま
のゆ〜、情の情め〜お涼し〜は、何の情
そやあ免〜下る位との國を〜と極ん〜い
〜お回〜の、お孫〜世は〜と〜

い〜此〜宮東北御ゆ〜、御ゆ天子の御まも回極
有〜〜今〜新〜
○難波の〜風土去多致仕〜とや〜ま
と西回廻遊〜とて、喜後〜と極下る
り〜五人を〜、各〜、く花を
り出〜、此〜、下十四五人
連〜、お月〜、難波とて、系は、久御遠
東西、遊皇は、極て、おあ、系と立〜、ま
足弱の、筋り、極は、巡遊、馬、お白、た

此處ハ定テ通一ノ智ルニテ換ト目見セ一ノヤ
未ヨリ精進トセマシ今多クハ無事ノカ
派九条トケル所モ御案一ノ知レル所ハ
之カクト云ん老モ多身カノ家取ル見限リ
テ者任セザリ一

○室曆明和ノ比爰傑々ノ老翁九条カ仕一
亦物カ向ノ山用ト承リテ用カ所カ司ノ事カ
知カリカ老翁元カ何カ人ト云ルトカ知
能ト世ルカ思ク其血富家カ一ノ所カ

流リ居カ家ノ物カ向ト昔カ止嵩八旬ト云テカ
迎色ト性来スル事ト追憶カカ一常カカ接
カ抱テカ所カカ更五幅ト云カ一カ介カ
カ更ノ申一人 名カ念 相カカカ候カカ遊云カ
カカ更カカ人ト揚テカカ風情ト云カ
カ更カカ有カカ出カカ編子ト細編細
表ノ小細編細カ沙ノ羽織ト云テカカ智カカ
カカカカカカカカカカカカカカカカ
カカカカカカカカカカカカカカカカ
カカカカカカカカカカカカカカカカ

ホの紋目と稱して活込新殿と出—又式時の
九条殿の河平正殿と云物よ—多々如帝と始席
のち若竹多根寄て遊宴を云子の権門の貴
家の用人とる—大に時のさ—うそ終と不知
〇式人余がを往たると見て昔の人の又又こ
今人の何とて動有んやと云り余日暮る如く
そのハ誠は未だりの辨れらる—其不以の如
代若人惠ハ旬尔ある—時代よあとも云られ
とも云世の人々皆死果て云のこ辨れり今

乃んも初をぬ—ハ旬と強ふ人の百人は猶
有る希に僅五十もや百も時代遠—ハ定て
若世不易の世界よ人若強弱の有ま—まよ付
まよもほ世のを人と見るにさうしてホホまき
志の活と云方が多とあうせて老の本懐と人
よ強り相毎とひ—用心—ほせと云ふ事のこと
こあ—く是亦な—る先尊—よ云をと
人よ強るの強ひ—こあ—に老い人は味ま
る—物なるよ面わ—ぬ物—と云り云々人

人之とて何とて母や可人の心とて母よ
しめよのしなまゝのしゝあはれよ及初まを
る事くあはれとて初用之しゝぬれしとも
爰よ親を泣かぬ人う奉勅もいやし其何と
るし春房よ海と世流とかきよと天救あると
心長閑よ樂しみ言しゝて終りんよと教まら
中々よ

○編布結总船とい五十きあ分あしゝ成百子
あのおしお交よし是い人るとまひ時代よより
厚為優方者其細い今乃れあまの吾衣長まを
よ随ひ金銀い文しゝとなり流るゝ結搦よ成
なり新物の價金銀と對揚せらるゝ仍自ら攻
算よ何しゝを來度物とても回しゝる程にまを
あしゝい鳥も何しゝうてうゝゝ名傳りよよくし
るよあえまをふゝ古物よ優れる搦よ親を搦て人
の氣をと奪ひ流るゝ流るゝ重無物ゝ是人と強る輕
為の情あゝ今の人心ん堅く長と政と親
臨ひ世人乃れ臨るゝ止み正法よ親しゝあはれ親

古自ら元は悔ましし

○聖教の社に國法の徳を令とをひて実系と
そんとして其系と改まそ最神宮の内の徳と
と修る所のまのあうて其れは^{サヤ}祭礼のまあは
あま常の人をとりていそいそと^{サヤ}其の親
徳に令れ通しは仍雅な物なるが所のとし其
あんと神んまの操まて人間の情情をりとして
あま四海と括まてし是神宮の心よいうる情
ふ(まややま)もあ(ま)社風はりたりし

平の系統は四代徳姓の嗣之実流の系母系は
あて絶つり是天ありて何ともまらるる形し
止むるは系をと悔惜しるは倫は実流と括
るる其の祖先とまの之代はし

○情を別山の系よりしるはま其物中清高代
よま教令有る之と候ま其の^{サヤ}徳に清高
候ま其の役人としも其れは仍世上其情
もや其徳有る止む中よもあう(ま)其を
中水揚の者とも^{世よ}常は情を(ま)其の世流る

之と判ぢる所まの皆逐てそ申往來の
言と成る是の御勘定と決りて判外
なることありし御之や私よ思ひ
流お物まより情愛の大なるお
かたが立寄るる水に海あり
富のゆき未多あるを思ふは
のゆい仔細ありし是れを
情愛も世乃凡俗のありし
さぬとも是等のゆいよ
知し

元覽

○夏尔言章やう流る解友の人を
てゆえ啓い石田流物と石田流物
もとある御付安國と惠渡長老と
と刑札も記されたる由今も其
の公にありし御唱へられし
常は辨を用ふるるるに
た近の付い御唱へし
辨と唱へるる御世
も仍に

辰の時は田中細言秀家誅刑の旨か〜五郎の
格よ下司と取者ささる唱(雅さよ)仍秀家初名
と再云用るまは浮田八郎と名稱してなる人秀家ハ
備前其他のち書 備前中細言秀家 五大老のま一人ありたる大岡義玄
のほも 神祇りみ云秀家と猶依りて終し
うま系一筆よあ方の徳魯の如く其喜幸石田
小あよ等しりれハ既よ死刑に処せらるるに
加別縁坐あるよ仍適て加えられぬ死罪
一筆と寄てを流せしは秀家父子流る在て

其まき月とことれ老る四良浮田左系 坂坂出羽
戸川花はも花房志了るハ其家(其呂)出流花房の
列子加り辰をま其四王(志と運)ハ花房一人
あく有し一誠秀家母貴して養生涯花房の未
と合て死度と事申と花房傳(して)公儀(一
そ中と通し)ま分秀家父子の體と花房も分傳(一
さし)せらや

○寛政の比紀許寧相治家以の其妹水戸寺將治

中合彼佩刀と描せて海分追奪さるる
彼士常刀此常刀よ能きて常よ初と書り
ハ常刀大よ常て武士が佩刀と云きて能く
常刀ハ是尔在とて常お常内分出して見せ
能りれハ彼士常刀と云て僅推力由在常を
とや常るよ常系流と云されぬハ此刀ハ常
能念よとて流と見一をり常子常書友
今方と能くこの心よて常能紀別一由る
心なる一とらり一が常の如く常常して

海分一能能るく没せしと云は是流能集
能何やと人常流有く焼失及書名と云一
能今ハ能作おく見ま常能候の能系常よ
主能常よ刀能者く加操の常能おどハ能て
能一ハ能世ハ能每能常なる友能能と云
能の如く能く能ハ能一と見一能り
能常刀ハ能久子の能能ハ能海能ハ能名能
能一ハ能名能能能人よ能能能と能ハ能能
能ハ能府能能の内分能能能能能能能能

しつり平素毎日の人よてまい可まの言を申云
或時何れ大造のり新録は常刀掛くまの
指揮せしむと 神能歩ら及れを授のり
見習をま——とて土井大炊民と見——場迄
をいさる常刀流土名初と受てまい忍しそ
やまの仍又初を——けるとまも忍しと計よ
くか授よせよとの指図あり——再三よ及てそれ
がよ——ややとく成大炊民ふ富——て宗物初
とるよあけを其時か授とに指あき——あ
あ

よ——場めて可成と再と河庄——とささるる
い定て存ありとありとあは傳可下とささるる
常刀云むのふ富——宗物と指あ授とあ
よく場め——とまも授てハ掛り役人の心
るよを海くむとあ方とさ——何——能授は指
因可者と指あ授みよあ——ハ自分の働ハあ
い河と常刀を付ハこり名置つをいよま
漱——再河と出——ハさるる格あよ力ハ
あ——て若のりハ能と心成る用——

こたあしむる危よも角よも此作教に能くと扱へ
も一に計ありくめ是とら音一と我いとふあさ
意之是も名し此の記録は有りぐ宙差るれ
いふ詳

○余いあまふ名よ侍るま一況八句の今ふ
扱とや氣徳り神味く操徳より氣氣い者
表の上ふも節骨志まりて持神奏こふあそ十
人は八人などい皆雨り希よそそ氣よりも思ふう海き
う此と云人者世こまふ何とも亦一うさ一しまき若

水火いお針のぬこ糸い糸い火とひをとふせく
夏若きとそそその火のぬく水と油て浸居んよ
い世の人皆病人とぬ一し僅よ吹風と細きて
思と海い糸とまひひりあの筋居るあさ居に
思よい人く一昔一むそ程こ程そとよ替替境
の形乃法中よまきう於魚多世其菜の食味意
多よい若り其の間よ念おも扱トつと一し
思氣よと紀よいあ一それとよ一とあふい流く
業たさる性若者入ぬん式人日寧思若の好意の

其人の出生の時長よあれといふ言もをぬくは
余もよ生れし人といふ言もぬくは
きりきり自然の時よ和しきりきり
三十一

○北丹波八丁山をうら割居部丹波の間よ有る
其間方三里餘は崎高大山に先きある所の海
よ仍公儀(百)とれを後に公儀山とある寛保の
比余の山内長按と命せられ彼地は十日斗浦取
して隈なく山中と見るに高杉を落すと長年取れ

共四面よりありれいえと仰せきり難しき道の
志共色くつましき公儀(形)を山入しきり
儀とあり共危角儀出しきり正して皆半違よ止ぬ
版よ金山の樹海々て昼も暗米のめくお海し
湖あり元分取ひて下州と葦り又山内よ山内殿の
志共信居して僅よあし候て山内と境を伴する
の志五人あり四人は山内殿しきり地取平なるふ
の樹ありと挿ふ中庭と集て各事きりといひ
小庭の伴土よ自生ある版よ碓氷の代り四方板田ひ

おしるす市井の風俗のたなるがやし備よまはる
の茶園も有る市井のたは山田の如くとも云し
とつぢせり今一人のまゝと云り楽う小あはま
よまをこ漏るる茶屋よりの別あるまよつ
よま十茶あはるる信教子よのまをり備よま
まろふ殿よ徳の凡と研考る治振あるて目録も
さぬ漆をぬくもどや仲をるる名と能きそ
うふあり橋やと備れは仲をるる名と不和るるよ
仍まよ住りと云らし備れは住地化せるまよ

足弱斗油しあてい安心ぬまのしあまらやと因ハ
るまの徳振振の徳款とも皆味方おくといふ楽
およ任まの人もよれまのいおまはまよま
つま出まのいおよ止るはるる名ととも聊
るまの氣をまよいよ信の常よ名は能とた遊よ
くいと云り昔酒のふ時よりあるまや名と
たえおれ又式地はよいと通しよ名と漏る
中町向ひの木深き樹上よ振る火中居しが
人海はるる名は名傳の行列せるとてた

孩を考る伴なく其の事一途にが好くよきや
愛うよの樹上は接とも影一り冠絶りけり
と脚るるの雲霧のこしし娘の接をがなよ令流
してあましくとんよせしぬし実もそ情人間
り道と物とをきしし又下等も年毒こしハ家
猪者小里の事あるまは物毎ふ自由なると公用
夜道邑の村役人猪者よ勅あしる孫を只食
よ家作に於て沖用場よ於ておのれをたとふ話
る事より公臣に仍役人ともめて其をとやあせ

跡よ山中のるるぬが変して跡をがましるるを
用いつけ一葉と潤るる有るの世世葉の介は急と
付くを波は心きくもま毒こし程はつらあ
来(海)一葉一した有るしそ竹一葉もあ及と
中をれは役人承体しるるまきるがそ返も是
絶つ葉は山程はもまはに友いうくと名居る
るよつあ日よて村役人來来(内々)めてやあめ
きるはは程のゆるは付はれしぬし道と採
しはとも何方ふもまははは役人程成とれふ

也別家東爾々の名中彼ふに仍家も業の介
友左有しんよい受て親を利くは方い左孫の
い不知親をと厭て親と好ししるあま役人
一世信と掛りしりききしりあく止ぬるふ
里よ六親さるるを始く知り

○土倉徳中馬常別土國城之内家内家い左田内中馬

盗別掛川城之方石左の身女之其侍女を田内家
當時系於不月代

来し女有言白面麻友取徳中馬の其妻と成
るふ能過せしふ此女を田内家土倉う娘友内家

と知る能の親とゆるま中こよ北スとて
とらあ徳中馬是れあ此とをいまといふも
心あししりや彼女とよ討めして其血も白
殺せし内家之と出でて口惜りやあまり人回
自言せし終しと世表向徳中馬えん病氣う
るも酒客し未何ともあふよまとい風吹よと屋
と不知定ぬ二ものし

○日次江戸神田三丁目と兼名屋屋をあといひて
新赤高臺の名有又何接接とやうん云音人の

そこへ言佛宗のひくふ子念仏と申出強宗の
石意形目と唱へつ流宗のり任坐原は知足
の心流と申ふ人ごとく意味のしもううそれとい邦
意と辨せよいふこれともあつてもと癖は成
よる事しと申せしやとぬよふわしは云ふるを
本邦の新宗なるまゝあま婦言とて尋ふは易う
なごめんの教識最因山の切方おまのしと云ふ
ん其傳の字ついか換の方便爲れぬ自づ中
邦のうん生の風依よをせし高きてもくみやし

ゆへせむ川の毒めをさよはれをいし居せんと
くうぬしりく羽夕形目称名と唱るぬくせ、此
と過はるゆあうまし
○式人東於一冠をよる屋あまか親教知るの
あると彼飛よあま、こやまめのはと 洞人も
あまあ福めく方ぶつーしんふてよりそ利さ
こきうんのもあと米メあまこ流口の巻紙後冊と
こを命めあらるとそれーの土産とを系於あり
き上うんの葉い流しーかし編いさのみ葉紙とを

涿石江村の色圓より考まじりて考致まで
まじりたる竹の産物分給は能く分けるとならん
いつたる候か上までしめ給ゆより、凡帳をて
篤く抄せしむしとて又式人系給下向し時
物よ心づかざる人候か、先の人名姓名のしれと
枚百枚記しそふ其人控下し居る人及も廣く
初初行能るまじしれ方よ用よさく収ひ
そせ是も先の人名目録の免使しよあつしれ
○ぬ申給ふ人上人いあすまか控取者く近原

ちうふま分今ふおて申取ぬのふふ申取
そ後、お取しとて申しや、止めれとも常の
人といふも、其し申取分、月給を其日つ
賄料とせしむる、自づと領し陸仕の者よある
て不任、兼食兼報し、その令取給の月とあ
ひて、結ると、案とき、協外、たま、初し、考お相考
と自づ、意分、明て、是と、買、價と、申、切、事、世、人、
よ、取、を、り、形、ノ、言、さ、る、者、よ、其、用、少、く、令、取
済と、保、め、て、取、考、の、様、事、考、よ、取、て、案、と

弁一々一系の子供い飛とる地といし將は親家
こ又さぬさく人あつといあつとあつと云は
地取少將の友と仰るぬ一しお四々の領主少
將多一一定てそましくめつは皆雨はる一し又は
卒の人命は射一して足下平討と好まうと申あ
及ありと云と申あつて再四て以御治のよと知
まり武治の人いいやくの親の國にありをふし
へ五カ上と申あつこ又借ル買つのもをひ有者の
親とカツて来ヨト云はしとあつてか換の親い

借一あつと云はるといやとよかつて来ヨト云てあ止
借は江戸と知る人あつてはしとあつと云と名忠
さそるの場と仰るり借るもの借まると云とあつ
てあつとい言案案は陽るこ何處に好まはる一
く又か身おの君好まるといあつと一西國に親
系あは親なる方あつと申あつと多あつとてうま
石用た換てあつたりまはると云とた換はあつたりまは
そは格之又女のつと云案あつていといと云
いといと云候あつといといと云候あつといといと云候あつ

流しとあたまふく^{ナイ}と云は^ハ列^レる^ハ事^ハ立
 むとのくそ^ハ編^レ流^シと^ハ奉^レん^トも^ハま^ハく^ハ段^ハ
 の女の御布、様およそんあ^ハゆるおよ^ハ相^ハ男^ハの
 禪^ハ白^ハ海^ハの^ハと^ハ時^ハと^ハま^ハる^ハい^ハ角^ハ力^ハ取^ハ計^ハこ^ハる^ハと
 娼^ハ婦^ハの^ハお^ハい^ハう^ハめ^ハい^ハけ^ハ細^ハ細^ハの^ハん^ハと^ハも^ハく^ハい^ハる^ハ
 衣^ハ振^ハと^ハ裾^ハと^ハ着^ハく^ハい^ハて^ハん^ハあ^ハい^ハる^ハめ^ハう^ハま^ハ尾
 籠^ハ云^ハなる^ハい^ハま^ハあ^ハて^ハも^ハ妓^ハ婦^ハい^ハゆる^ハい^ハて^ハん^ハ迎^ハさ
 び^ハま^ハて^ハの^ハ女^ハか^ハえ^ハの^ハゆ^ハい^ハま^ハさ^ハて^ハら^ハう^ハか^ハく^ハん^ハ
 い^ハ飛^ハ波^ハの^ハ舞^ハ女^ハが^ハ流^ハ色^ハなる^ハ本^ハ街^ハ舞^ハ布^ハと
 引^ハぞ^ハり^ハ斗^ハよ^ハ長^ハ足^ハま^ハる^ハお^ハり^ハぶ^ハせ^ハる^ハん^ハさ^ハい^ハの^ハい^ハふ^ハ
 よ^ハい^ハう^ハなる^ハ心^ハお^ハや^ハ



